様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５２０６５８
研究課題名（和文）　墓葬資料による中国春秋時代社会の研究

研究課題名（英文）　A study of Spring and Autumn period society based on tombs in China

研究代表者
小澤 正人（OZAWA MASAHITO）
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：00257205

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、墓葬に副葬された青銅礼器を資料として、春秋時代社会の特質を明らかにすることにある。前期から中期前半にかけての青銅礼器は西周の延長線上にあり、地域性に乏しい。しかし中期後半になると地域性が顕著になり、政治的な分裂が反映される。反面、青銅礼器の変化は地域を越えて共有されており、その背景には政治的な分裂を越えて共有された規範の存在が窺える。春秋時代はこのような規範による緩やかな統合に根ざした社会であったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the feature of the society of the age of Spring and Autumn. The study material is based on the bronze ware excavated from the grave. The bronze ware from the first term on the age of Spring and Autumn to the mid-term first half succeeds to the feature at the West Zhou period, and lacks the regionality. But when becoming the mid-term latter half in the age of Spring and Autumn, the regionality becomes remarkable. In the background, there was a political division. However, changing the bronze ware was shared across the region. There was a shared standard in the background in spite of a political division. The age of Spring and Autumn is thought to be a root society that sat by gradual integration by such a standard.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：中国考古学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：中国・墓葬・春秋時代・礼制

１．研究開始当初の背景

春秋時代は邑制国家に基づく殷・西周王朝から、皇帝を頂点として広大な領域を統治する秦漢帝国への過渡期となる時代である。これまでの春秋時代社会の研究は、主に文献資料に基づいており、上記のような中国古代社会の転換点としての位置づけは、すでに 1950～60 年代に西嶋定生氏、増淵龍夫氏らの研究により確立されている。さらに近年では平勢隆郎氏により出土文字資料を使った春秋社

会の基本である国制の検討もおこなわれている。しかし春秋時代に続く戦国時代社会の研究が、豊富な出土文字資料を使い、従来の伝世文献研究にはない多様な成果を上げつつあるのに比べると、出土文字資料の少ない春秋時代の文献からの研究はやや停滞した状態にある。その反面近年の中国に於ける考古学の進展により、春秋時代の考古資料、特に墓葬資料は蓄積が進んでいる。その結果、地域的な資料の空白が埋められ、また未盗掘の大型墓や集団墓地といった、これまでにない種類の資料が報告されるようになっており、資料に限っていえば量的に増加しただけではなく、質的にも豊かなものになってきている。ただしそれが考古資料であるため、文献を中心とした伝統的な春秋時代研究では十分に生かされていないのが現状である。

２．研究の目的

本研究では文献資料による研究とは異なった、考古学資料、特に墓葬資料を用いて、新たな視点からの春秋時代社会の特質を明らかにすることを目指すものである。

３．研究の方法

本研究では春秋時代の墓葬を資料としたが、特に青銅礼器を中心に検討をおこなった。具体的な方法は以下の通りである。

（１）副葬青銅礼器の編年

まず基礎作業として青銅礼器の編年をおこなった。

（２）副葬青銅礼器の検討

副葬された青銅礼器のセット構成やその変化のあり方を検討する。

（３）以上の検討を受けて、副葬された青銅礼器に反映される春秋時代社会の特質について検討する。

４．研究成果

（１）青銅器編年

本研究ではまず青銅礼器の編年をおこなった。その概要は以下の通りである。

①　春秋前期

前期の主な墓葬としては、陝西省瀧県邊家荘１号墓、宝鶏西高泉１号墓、河南省三門峡上村嶺 1820 号墓、光山上官崗墓、信陽平橋 2 号墓、信陽平西 5 号墓、平頂山北滍村 M1、新野小西関 74 年墓、山西省曲沃曲村 93 号墓・102 号墓、山東省曲阜魯国故城 48 号墓、日照河崮崖１号墓・２号墓、湖北省随州桃家坡１号墓・２号墓、湖北省当陽趙家塝２号墓をあげることができる。基本的な器種は鼎、簋、方壺、盤・匜で、これに鬲・甗などが加わる場合が多い。

②　春秋中期前半

この時期の墓葬としては、陝西省宝鶏福臨堡１号墓、河南省中州路 2415 号墓、新鄭唐戸 9 号墓、桐柏毛岐墓、濵川彭店墓、山西省上馬 4078 号墓、山東省劉家店子 1 号墓・２号墓、臨沂中洽溝 1 号墓、滕州薛国故城 1 号墓、曲阜魯国故城 201 号墓、湖北省枝江百里洲墓などがある。基本的な器種は前期と同じ鼎、簋、方壺、盤・匜だが、盆の出土も多い。

③　春秋中期後半

この時期の主な墓葬としては、陝西省秦家溝 1 号墓、河南省洛陽中州路 4 号墓･6 号墓、淅川下寺 1 号墓・2 号墓、山西省侯馬上馬 13 号墓・1013 号墓、長治分水嶺 269 号墓・270 号墓、山東省薛国故城 2 号墓・4 号墓、湖北省当陽金家山 9 号墓、当陽趙家塝 2 号墓・8 号墓、江陵岳山墓、湖南省岳楊鳳形嘴山 1 号墓などがある。中期後半では新たな器種が多数現れ、器形にも大きな変化がみられる。基本となる器種は有蓋鼎、簋、敦、方壺、盤・匜である。

春秋中期後半は有蓋鼎や罍の分布の拡大、敦・鐎壺・鑑といった新しい器種の出現、さらに簠・盤・匜といった伝統的な器種も形を変えるなど、それまでの青銅礼器が大きく変化する時期となる。

④　春秋後期前半

この時期の墓葬としては、陝西省宝鶏八旗屯 27 号墓、河南省洛陽中州路 27 号墓、輝県瑠璃閣甲墓・乙墓、尉氏河春秋村墓、新鄭李家村墓、淅川和尚嶺 1 号墓、淅川下寺 10 号墓、山西省臨猗程村 1001 号墓・1082 号墓、侯馬上馬村 1004 号墓･1006 号墓･2008 号墓、河北省唐山賈各荘 18 号墓、三河双村 1 号墓、山東省長清仙人台 5 号墓、淄川磁村 3 号墓、陽穀景陽崗村墓、滕州薛国故城 3 号墓・6 号墓・9 号墓、莒南大店 1 号墓、安徽省寿県蔡公墓、湖北省宜城駱家山 1 号墓、襄陽団山 1 号墓、枝江高山廟 14 号墓、当陽楊家山 6 号墓、江陵岳山墓などをあげることができる。基本となる器種は有蓋鼎、敦・蓋豆、方壺、盤・匜である。

⑤　春秋後期後半

この時期の墓葬としては陝西省咸陽任家嘴墓、河南省三門峡后川 2040 号墓、固始侯古堆墓、淅川和尚嶺２号墓、山西省太原金勝村 251 号墓、万営廟前村 61M1 号墓、潞城潞河 7 号墓、長治分水嶺 25 号墓、河北省易県燕下都 31 号墓、北京市通県中趙甫墓、山東省長清崗辛墓、済南左家窪墓、湖北省襄陽蔡坡 4 号墓、当陽曽家溝 5 号墓、当陽金家山 235 号墓などがある。基本となる器種は有蓋鼎、敦・蓋豆、戦国型壺、盤・匜である。

（２）春秋前期墓葬の検討

（１）の青銅器編年の成果をもとにまず春秋時代前期の墓葬について検討を加えた。ここでは西周時代後期から春秋時代前期とされる虢国墓地 2001 号墓と北趙晋侯墓地 93 号墓を取り上げそれぞれの青銅礼器の検討を

加えた。
その結果、虢国墓地 2001 号墓・晋侯墓地 93 号墓とも青銅礼器を単なる食物を入れる容器としてではなく、それを使った祭祀に基づき副葬していたこと、また両者の青銅礼器は煮炊器、盛食器、酒器、水器といった構成を同じくしており、青銅礼器を使った祭祀を共通としていたと考えられること、などが明らかになった。
ただし青銅礼器は副葬のためにのみ存在した器物ではなく、現実世界において祭祀に使われた道具であったことから、副葬された青銅礼器から想定される祭祀は、現実世界においても行われていたと考えられる。言い換えれば、現実世界で行われていた祭祀に使われていた青銅礼器の器種が、そのまま副葬されたのである。
従って、2001 号墓と 93 号墓が、それぞれ虢国と晋国という別の諸侯国で造営された墓葬にも関わらず副葬された青銅礼器の構成が同じであったことは、両国が現実世界においても祭祀を共通としていたことを意味している。言い換えるならば、現実において祭祀を共通としていたからこそ、両者は同じ構成の青銅礼器を副葬したのである。
この異なった諸侯国が祭祀を共通としていたことについて、周王朝との関係という視点から以下のように考えられる。
周王朝の支配構造を検討した松丸道雄氏は、周王朝が王と諸侯との間の君臣関係を維持する政治的支配理念である宗法制を維持するため、諸侯に祖先祭祀を強要し、その祭器として青銅礼器を与えるなどした、との指摘を行っている。
このなかで、青銅礼器を使った祭祀が周王室により強要された、とした点は重要である。これによるならば、虢国と晋国が青銅礼器を使う祭祀を共通としていたのは、単に文化的な習俗を共にしていたというだけではなく、両者が共に周王朝による統治体制に組み込まれ、周王朝による祭祀を受け入れたため、ということになる。つまり青銅礼器が祭祀をおこなうセットを構成したのは、それが周王朝の祭祀に基づくものであったためだと考えられるのである。

（３）春秋時代中期・後期の検討
以上見てきたように、春秋時代前期の墓葬出土の青銅礼器からは、西周王朝のもとで強い統一性が見られた。このような青銅礼器が春秋時代中期から後期にどのように変化したかを次に検討した。
上記（１）の青銅器編年でも述べたように、青銅礼器では春秋時代中期後半に大きな変化が生まれている。ところが中期後半の変化の現れ方は一様ではなく、地域ごとに違いが見られる。この点に注目すると中期後半の青銅礼器を渭水流域、汾水流域・中原、南陽盆地・両湖平原、河南中部、山東といった５つの地域に区分することができる。
それぞれの特徴を見ると、まず汾水流域・中原では楕円形タイプの敦、無蓋の罍などを特徴とする。南陽盆地・両湖平原では蓋身タイプの敦、有蓋の罍の出土が共通する。河南中部は上記の２地域の中間的な様相を示す。例えば、無蓋の罍などは汾水流域・中原に近いが、蓋身タイプの敦は南陽盆地・両湖平原と共通する。山東では扁平な鼎、独特な缶などが他の地域にはない特徴である。渭水流域では有蓋鼎や敦といったこの時期に特徴的な器種が見られず、中期前半までの様相が継続している。
これに続く春秋時代後期前半は、中期後半に現れた変化がさらに進展する時期である。基本となる器種では簋が少なくなり、代わりに蓋豆が多くなる。青銅礼器の特徴から見ると、中期後半の５つの地域がなお有効である。
汾水流域・中原では楕円形タイプの敦、無蓋の罍などを共通の特徴とする。淮河中上流域・南陽盆地・両湖平原では球形タイプの敦、有蓋の罍、平底で注ぎ口が動物型の匜が共通している。山東・河北北部ではやや扁平な鼎、脚部が高い蓋豆などが共通する。河南中部はやはり中間的で、盆などは中原に近いが、蓋身タイプや球形タイプの敦などは南陽盆地などに近い。渭水流域は依然として変化が見られない地域である。
さらに春秋時代後期後半になると、酒器で戦国型壺が中心となるといった大きな変化がある。青銅礼器の特徴からすると、渭水流域、汾水流域・中原、淮河中上流域・南陽盆地・両湖平原、山東・河北北部といった区分になる。
汾水流域・中原は矮足化した鼎（矮足鼎）、鬲型鼎、合身タイプの敦、無蓋の罍などを共通とする。渭水流域でもこの時期には新しい青銅器があらわれるようになる。基本的な青銅礼器は汾水流域・中原に近いが、敦や罍を欠く点が異なる。淮河中上流域・南陽盆地・両湖平原は脚が高い鼎（高足鼎）、球形タイプの敦、有蓋の罍などを共通とする。山東・河北北部はやや扁平な鼎、球形タイプの敦、脚部が高い蓋豆などが共通する。
このように、春秋時代中期後半以降になると、前期までに比べて地域性が強くなるといった現象が確認できるのである。この地域性は、春秋中期後半に顕著になる青銅礼器の変化の受容の違いにより現れたと考えられる。

（４）墓葬の副葬礼器に見られる地域性の検討
以上（１）～（３）の検討をもとに、特に春秋中期後半以降の地域性の問題について検討した。

先秦時代において青銅礼器は祭祀や儀礼に使われていた。西周時代では青銅礼器は国家の政治目的のために制作されていたのであり、共通性が顕著である。これが春秋時代になると、各国の分立により地域ごとの特徴が顕著になってゆくと考えられる。先に設定した地域性は、このような青銅礼器の地域化の結果生じたものと解釈できる。

ところでここまで主に青銅礼器の違いに注目してきたが、ここで視点を変えてみると、青銅礼器には上記のような地域を越えた、共通性が存在していることに気付く。

例えば、春秋中期後半に隆起した蓋と深い胴部を特徴とする新しいタイプの鼎が姿を現すが、その普及は渭水流域以外ではほぼ同時期であった。また同じ中期後半には簋の身に小三足を付けた敦が、地域差をもちながらも、ほぼ同時期に各地へと普及している。春秋後期前半からの蓋豆、春秋後期後半からの戦国型壺なども、同じように短期間で広い範囲に普及している。

つまり春秋時代の青銅礼器には、器種ごとの形態の違い、分布範囲の限られた器種などにより地域性を認めることができるが、同時に新しい器種がそのような地域を越えて拡がる事例も多いのである。この点については、春秋時代に政治的な分裂により青銅礼器の地域化が進展するが、同時に新しい変化が共有化されるような文化交流があり、それにより青銅礼器全体の統一性も保たれていたとする、朱鳳瀚氏の指摘がある。

この朱氏の指摘は適切であるが、そこで問われなければならないのは、「文化の交流」そのものの実態である。

春秋時代の青銅礼器には西周時代のような政治的な意味は弱まったが、祭祀・儀礼においては、なお一定の役割を担っていた。青銅礼器は機能的には、煮炊器、盛食器、酒器、水器からなりたっているが、このように異なった機能が組み合わされるのは、儀礼・祭祀の実行においてこれら機能が求められていたからに他ならない。この青銅礼器の機能の組み合わせは各地域で共通しているが、これは各地域でおこなわれた儀礼・祭祀が西周時代からの共通の基盤に立脚して組み立てられたことによる。共通の基盤にたつ儀礼・祭祀があるから、各地で作られる青銅礼器は器種や器形が異なっていても、必要とされる機能に基づく煮炊器・盛食器・酒器・水器といった組み合わせのセットは共通するのである。

ただしそれは各国が西周時代の儀礼・祭祀をそのまま続けていたというものではない。有蓋鼎や敦、さらには戦国型壺といった、青銅礼器セットの中心となる器種にも変化が見られることから、青銅礼器を使う儀礼・祭祀は絶えず変化を続けていたと考えられる。主要な器種の変化は単に青銅器制作における工芸上の問題に止まるものではなく、その背景には青銅礼器を使う儀礼・祭祀の変化が想定されるのである。

春秋中期後半以降、青銅礼器の地域性が顕著になることは、各国で独自に青銅礼器の制作が始まったためと考えられる。それにもかかわらず新たな器種が出現するとそれが時を経ずに各地で共有されるという現象は、上記の青銅器を使った祭祀・儀礼の変化が地域を越えて共有されていたことを意味している。つまり儀礼・祭祀が共有されていたために、青銅礼器の変化を伴うような祭祀・儀礼の変化が生じれば、それはほぼ同時に各地で共有され、その結果青銅礼器も各地でほぼ同時に変化するのである。

そこで問題となるのは、このような変化し続ける祭祀・儀礼の共通性が何によって保証され、維持されていたかということである。西周時代であればそれは西周国家により維持されたわけだが、春秋時代においてはそれに相当するような存在はない。

ここでは青銅礼器をつかう祭祀・儀礼の共通性を維持し続けたものを、青銅礼器を使う儀礼・祭祀をおこなった国々の間で共有された「規範」に求めたい。ここでいう規範とは、制度のような固定的なものではなく、祭祀・儀礼を担う人々や集団の連鎖により形作られる動的なものであり、それが共有されることで、政治的な分裂にもかかわらず儀礼・祭祀の統一は維持されたと考えたい。あるいはこの規範を春秋時代の「礼制」と呼ぶことも可能ではあるが、それは西周時代の国家という背景を持つ「礼制」とは意味は異なる。

共有された規範に基づき儀礼・祭祀がおこなわれたことから、青銅礼器も基本的には共通するし、主となる器種に変化があれば各地で迅速に反映される。しかしこの祭祀や儀礼が制度のように明文化され強制力を持つものでないため、分裂している地域ごとに青銅礼器の細部に解釈や表現を加える余地がある。例えば鼎を「蓋付で鍋状の三足器でスープを盛る器」とした場合、足の高い、低いはその本来の機能とは関わらないのであり、儀礼・祭祀をおこなううえでも大きな影響はない。逆にいえばそこに地域による解釈や表現が入る余地が生じるのであり、このことは主となる器種以外の器種にもあてはまる。このような個々の器種における解釈や表現の違いが、春秋時代青銅礼器の地域差を生み出したのである。

（５）結論

以上の検討をもとに最後に春秋時代社会の特質をまとめると以下のようになる。

春秋時代前期では西周時代後期の様相が続いており、青銅礼器にも地域差が少ない。

しかし中期後半になると青銅礼器が大きく変わるとともに、その受容の差から地域性が顕著になる。このことは、西周時代の周王朝のような青銅礼器の中心が存在せず、地域ごとに青銅礼器の制作が始まった為に起こった事と考えられる。青銅礼器が儀礼・祭祀に使われた器物と考えるならば、春秋前期の政治的な分裂からややおくれて、各国はそれぞれの儀礼・祭祀を確立していったと考えられる。

しかし同時に煮炊器、盛食器、酒器、水器からなる組み合わせは各地域で共通している。さらに春秋中期後半以降の変化も地域を越えて共有されており、青銅礼器を使った祭祀・儀礼の変化が地域を越えて共有されていたことがわかる。これらの背景には、地域を越えた「規範」の存在が考えられるのである。

以上をまとめるならば、西周王朝の崩壊を受け、春秋時代には「諸侯の時代」ともいえるような、多数の国家が乱立する時代となり、政治的な分裂が進む。しかし政治的な分裂にもかかわらず黄河流域から長江流域にかけ規範の共有がおこなわれ、緩やかな統一性は保持されたのである。その意味で春秋時代社会は規範の社会ということが出来る。

以上の結論はこれまでの春秋時代研究にはなかった視点であり、「中国」としての文化的な一体性の背景を明らかにした点が重要である。今後はこのような「規範」のもととなった西周時代のいわゆる「礼制」の確立過程、さらにこの「規範」がどのように秦漢帝国により置き換えられていくのか、といった点が検討課題となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①<u>小澤正人</u>「西周時代後期における青銅礼器の副葬についての一考察」菊池徹夫編『比較考古学の新地平』所収、2010 年、825-862 頁

６．研究組織
(1) 研究代表者
小澤　正人（OZAWA MASAHITO）
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：00257205